進修同窓会々報

発　行　土浦一高進修同窓会
編集人　同窓会会報編集委員会
印　刷　常陽新聞新社

旧本館公開時の弦楽部ミニコンサート（旧本館玄関ホールで）

土浦一高校歌

堀越　晋　作詞
尾崎　楠馬　作曲

一、沃野一望数百里　関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山　空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は　終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川　其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏　蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて　湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて　我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて　我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて　我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く　霞ケ浦のいや広く
嗚呼　桜水の旗立てて　我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児　亀城一千の健男児

―目　次―

2面　学校長あいさつ
教頭あいさつ
3面　平成20年度総会報告
4面　卒業50周年記念同窓会
卒業40周年記念同窓会
卒業25周年記念同窓会
定時制部会と総会
5面　惜別
6面　卒業生レポート
7面　支部だより
8面　お知らせ・話題
9面　母校だより
10面　職員室だより・部活動報告
11面　進路状況報告
12面　平成19年度決算報告等

「同窓会会報に寄せて」

学校長　村松　輝美

進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃から本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただいておりますことに、心から御礼を申し上げます。

毎年のことですが母校の近況を報告させていただきます。

生徒会活動については、相変わらず自主的かつ活発に行われており、特に本校の三大行事である六月の「一高祭」、九月の「一高オリンピック」、十月の「歩く会」などでは、生徒が自主的に実行委員会を組織し、企画・立案の段階から運営・実施、反省・評価に至るまでをおこなっております。今年で「一高祭」が第六一回、「一高オリンピック」が第三一回、「歩く会」が第四〇回を数えました。このように着実に回数を重ねられるというのは、本校に学ぶ生徒達の能力の高さを示すものだと思います。今年度の「一高祭」は、『煌～地球の、未来の、私たちの～』というテーマで行われ、生徒それぞれが個性を発揮して盛大に開催されました。一日目は朝のうち残念な天気でしたが、天候にも恵まれた二日目の入場者は三千三百余名に上りました。現在の一高生を見るにはこれが一番かと思います。毎年夏に先駆けて催される一高祭を是非一度ご覧ください。また部活動においてですが約八割の生徒が加入しています。吹奏楽・合唱・弦楽の音楽三部や、硬式野球・サッカー・バスケット・バドミントンなどは、それぞれ多数の部員を抱えて活動しており、ある時代の同窓生の方には信じられない放課後の風景ではないかと思います。

入試状況でございますが、東大合格者数二六名と二一年連続で二〇名を越えるなど、今年度もしっかりした実績を上げてくれました。今後も「やればできる」という断固たる決意を胸に生徒諸君には頑張ってもらいたいと思います。

最後に、これからの本校の課題等についてですが、知徳体のバランスのとれた人間として生徒たちを育てながら、どのように現在の進学実績を維持、発展させていくかということにつきるかと思います。学校評議員の方の協力をいただいてその点をノブレス・オブリージュという言葉に要約して昨年度より中学生向け学校案内パンフレットに掲載させて頂きました。その意は「わが校は、新しい社会をデザインする先導者として未来を切り拓きたいと願う若者たちが集う学舎です。そのために勉学に勤しみ、心身を鍛え、友との交流を糧とする――諸君には、その責務があるのです。」というものです。また、在校生には合言葉『**頭鍛え、体鍛え、心鍛え**』や、キャッチコピー『**鬼のようにできる土一の英語**』などを駆使して意識改革に努めております。

これからも全国公立高等学校の雄たらんと、本校のブランドスローガンに【THE FLAGSHIP】を掲げ、一丸となって頑張って参りたいと考えておりますので、同窓会の皆様方には今後ともご指導とご支援をお願い申し上げます。

基本に忠実

教頭　松延和典

本校では、平成十八年四月より全日制の教頭は二人となりました。私は昨年四月、その一人として九年ぶりに戻りました。長い歴史を有し伝統を大切にしつつも、新しい時代の流れに柔軟に対応し、全国に名を馳せる進学実績を上げている土浦一高のすばらしさを、以前にも増して改めて感じています。また、村松校長先生はじめ、やる気と気力の充実した先生方、随一の高い能力を有する生徒、優れた教育システム、こういった環境の中で仕事をさせていただいていることに感謝しています。

さて、本校へは全国の名だたる進学校が視察に来ます。その対応は教頭の仕事ですので、説明内容の一端から、現在の様子を報告したいと思います。

本校は、全国公立高の「THE FLAGSHIP」を標榜し、将来能力に見合った活躍貢献をしてほしいとの願いを込め、「ノブレス・オブリージュ」の精神を教師生徒で共有し、「頭鍛え、体鍛え、心鍛え」を合言葉に生徒の指導にあたっています。

特に、全国の多くの進学校が効率を求めた進学対策として、二年生から文理分けをするなか、三年生になってから文理分けをするなど、基本に忠実に安易に流されることなく、常に本物を求めています。視察者に、物理を全員が学習することなども、驚きをもって迎えられることが多いですが、これは同時に、本校生の能力の高さを示していると思います。幅広く学習し、視野を広げてこそ、世の中の様々な諸問題を解決する人材が育っていくのではないでしょうか。この学習に対する前向きな一貫した姿勢、勉強を通して鍛えられる人間性、すなわち困難に立ち向かう勇気、努力、不屈の精神、謙虚さなどの様々な素養を涵養しています。これらが、学校行事や部活動その他全ての面に浸透しています。

生徒の高い能力に感嘆しつつも、期待に応えられるようこれからも頑張って参りますので、皆様には引き続きどうぞご支援の程お願いいたします。

十三年ぶりに母校に戻って

教頭　豊崎利明

平成二〇年四月より本校教頭勤務を拝命し、半年が過ぎようとしています。これまで生徒に焦点を合わせた教諭の仕事から、先生を含めた学校全体、そして外部にまで視野を広げた教頭の仕事は多岐に渡り大きな発想の転換の必要性を感じています。かつて本校教員として数学科職員室で机を並べた村松校長先生、松延教頭先生のご助言を得ながら、教頭としての職務に専念できることを大変幸せに感じています。

さらに教頭の一人は進修同窓会の副会長になるということなので二十五回卒の私がお引き受けし、微力ながら同窓会のお手伝いをさせて頂いております。本校のwebは進修同窓会のwebにつながっており、その更新のお手伝いもしています。毎週火曜に旧本館活用委員会がありますが、その委員はかつてお世話になった恩師、上司、先輩の方々ばかりで、今回少しでも恩返しができればと願っています。また校長の代理としていくつかの進修同窓会の支部総会に出席させて頂きました。先輩方が多く集まるなかで私が挨拶するのは僭越とは存じますが、役目上最近の本校の様子をお話しさせて頂くと共に、先輩の方々と親しく懇談させて頂く機会を得ました。本校に赴任して多くの先輩方とお会いし、お話する中で、改めて本校の素晴らしさと百十一年の伝統を感じています。

十三年ぶりの土浦一高ですが、難関大学に多くの合格者を輩出してきたその抜きんでた教育システムは健在で、「THE FLAGSHIP」をブランドスローガンに掲げ、熱心な指導の下、生徒達は高いレベルでの文武両道を図り、自己管理能力を育成し、充実した高校生活を送っています。そのような本校の躍進ぶりを朝日新聞が『土浦一の素顔（新都市物語）』（平成二〇年六月）と題して六回の特集を組み、大きな反響を呼びました。

再び母校で働けることへの感謝の気持ちを込めて微力ではございますが本校の益々の発展のために全力を尽くす所存でございますので、皆様方のご助言、ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成二十年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月十三日（日）、平成二十年度定期総会が、母校土浦一高体育館において会員多数出席のもと盛大に開催されました。

総会は、恒例となった応援指導部のリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会し、物故会員への黙祷の後、平田公敏会長、村松輝美校長の挨拶があり、大野金一副会長を議長に以下の議案が審議され、可決承認されました。

一　第一号議案　平成十九年度事業報告及び決算報告について
二　第二号議案　同窓会役員の改選について
三　第三号議案　平成二十年度事業計画（案）及び予算（案）について

総会であいさつする平田会長

総会後、卒業周年祝賀式に移り、本年は六十周年はなく（本年該当の中四十八回生は来年、高一回生と一緒に実施するので）、高十・定八回（五十周年）、高二十・定十八回（四十周年）、高三十五・高理十二・定三十三回（二十五周年）の方々をお招きいたしました。

祝賀式では、来年五十周年を迎える高十一回の市川紀行氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、高十回の鈴村博一氏より、本年卒業五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。

また、会場を移動しての祝賀会にも数多くの方々の参加があり、賑やかで和やかな祝宴がもたれました。

総会の会場風景

定時制針路

教頭　土田尚宏

秋も深まり、四年生は同窓生となる卒業に向けて準備を始める時期となりましたが、私も新入生とともに赴任し、生徒の様子を捉え、進むべき針路を思索しているところです。これから、県下のフラッグシップ校へと築いてくれた同窓生の皆様に感謝するとともに、伝統ある誇り高き旗を汚すことなく益々発展するよう努めたいと思います。

いま、多様な生徒からなる定時制に希求されるものは、かなり変化しています。学習面での支援はもちろんですが、社会性を養うことも大変重要で、それには学校行事が大きな役割を果しています。六月に実施された星光祭では、短時間の準備にも拘らず、お化け屋敷や演劇を行い、人気を博しました。お化け屋敷は、昼間は全日制が教室を使用しているので、作っては片付け、作っては片付ける、夜だけのお化けに相応しい活動となりました。演劇も全日制と定時制からのアンケートを基に、生徒の生活状況や意識の違いを織り込むなど、台本作りから始まる手の込んだものでした。生活体験発表では、戦争体験談が発表され、身近な友達からの話でもあり真剣に心で聞いていました。このように多くの経験が社会に出る糧となっています。クラスには父や母また祖父母の年齢となる方がおられ、クラスの中に一つの家族あるいは社会が形成されています。いろいろな知恵や経験が生かされ、よき先輩、よき教育者となり、私たちにはできない舵を取ってくれています。

生徒は「自分は何のために生きているのだろう」と考えていますが、確答はないにしろ、明確に示さなければなりません。人は他人のためだけでなく、自分のために生きていて、その気になれば多くのことができる可能性があります。しかし、生徒は不可能としているのは、環境のせいと考えがちです。定時制ではその環境を少しでも整えられれば、と考えています。そして、結局は生徒自身の力であることを気づかせ奮励させる指導です。したがって、フラッグシップ校だけに、目標である、高い知性とたくましい心身を有する青年を育成できる救助艇となり、さらに桜水の旗立てて、これからの針路を目標に向かって進め、同窓会へ送り届ける役割を担って行きたいと思います。

卒業五十周年を迎えて

私達は昭和三十年四月入学し、昭和三十三年三月卒業しました。戦後の混乱がやっと落ち着いてきた頃でした。

小学校、中学校と比較的狭い地域範囲の集団でしたので同級生はほとんど顔見知りでしたが、高校になりますと広い地域の中学から入学して来ましたのでクラスの中で顔見知りは極一部で、知らない人たちが多かったことが強烈な印象として今でも思い出します。

これからの新しい高校生活への期待と僅かな不安と戸惑いの入り混じった気持ちで入学したのは私だけではなかったはずです。

それからの三年間、長い人生の中で高校生の三年間は最も輝いている時代でした。入学の時に初めて会った同級生が卒業の時には生涯離れることのない絆で結ばれるようになっていました。

私達がより幸運だったのは昭和三十二年八月、三年生の時、一高野球部が甲子園出場を果たしたことです。修学旅行のなかった一高で我々だけが甲子園応援という修学旅行ができました。

卒業後はそれぞれ進学にまた就職にと違った道に進んで行きましたが、高校の三年間で得た友情と絆は切れることはありません。

卒業二十五周年、四十周年と同窓会を開きましたが今回平成二十年度進修同窓会総会での卒業周年記念祝賀式で我々の高十回卒がお祝いをしていただきました。これを機に学年懇親会をホテルカンコーで開きましたが百七名が参加、遠方からの参加も多く、また卒業以来初めて会う友もあり、おおいに盛り上がった会となりました。

多感な学生時代を同期で過ごした級友達と再会するのは、つまり自分の青春時代と再会するようなもので何ともいえない楽しさと感慨深いものがあります。

懇親会は私の幹事としての挨拶の後、土浦一高卒業生で初めての茨城県議会第九十九代議長に就いている桜井富夫君の挨拶、堀越眞哉君の乾杯の音頭のあと宴会に入りましたがすごい盛り上がりでここそこで昔話の輪が出来、途中で

4面へ続く

3面からの続き

一高応援団OBの突然の参加で校歌の合唱となり、東京支部の沼里征二君の中締めで次の再会を約束して散会となりました。

このような祝賀会を開催していただいた進修同窓会総会会長はじめ役員の皆様、土浦一高校長先生はじめ担当の方々に厚く御礼申し上げます。また同窓会を開催するにあたって住所録の点検から始まり連絡諸準備に尽力いただいた平堅次君、佐々木弘司君、小野慶一君、矢口成也君、矢野郁夫君、準備会に毎回遠くから参加いただき記録写真をとっていただいた沼里征二君、毎回集合記念写真の労を取っていただいている藤本秀一君、その他準備会に参加いただいた地区委員の方々に感謝いたします。

最後になりましたが土浦一高、進修同窓会の益々の発展をご祈念申し上げお礼の言葉といたします。

(高十回卒　鈴村博一)

卒業四十周年記念同窓会

私共は土浦一高卒業四十周年を迎え、この記念同窓会に一七〇名を超える大勢の仲間が集まることができた事を、大変嬉しく誇りに思っております。

二十五周年の同窓会から十五年が経過し、その間に一度も全体の同窓会が開催されずにきてしまいました。今回の四十周年を迎えるに当り、準備をすることの大変さを痛感させられました。当初はクラスの幹事代表と、土浦周辺に在住しているメンバーに声かけをして実行委員会を立ち上げ、三十名に近いメンバーで昨年の十月に第一回の準備会をスタートしました。

手造りの同窓会を企画したいとの意向で、名簿の作成からアトラクションの企画まで全て手造りでやり通しました。しかし名簿の作成には大変苦労しました。四百名を超える同窓生に連絡をとり、そして出欠の回答の返事、名簿記載の有無等、全員に行き亘るように何度も郵便のやりとりをし、何とか確認がとれ全体が見えてきたのは、三月の半ば頃になっていました。その間二十回卒の同窓会のホームページを立ち上げ、随時出欠状況等が見られる様にして、クラス幹事の方々に声かけをしてもらい最終百七十六名の出席となりました。特にこの間は国谷君が名簿からホームページまで全て管理し、完成してくれた尽力は並々ならぬものがあったと感謝しているところです。

当日は、司会を担当する長峰君のスムーズな進行でスタートし、恩師の先生方の挨拶、そして江畑君の先生方へのインタビューのやりとりで先生方の近況等も聞くことができ、お元気なお姿を拝見し嬉しく思うことができました。しかし今回出席された先生は中山先生、池井先生、平田先生と三名の方々で若干の寂しさがありました。後半になってから、手造り企画のメインが待っておりました。在学当時音楽が好きだった仲間のバンド演奏となり、一つは菊池君がリーダーの「ジ・オールドシップス」もう一つは、川井君がリーダーの「ザ・レイジン」と二つのバンドがオールデーズをふんだんに演奏し会場の雰囲気は最高潮に達しました。ビートルズナンバーが演奏された時は、飛び入りで歌う仲間も現れ、一瞬にして高校時代へタイムスリップした状況でした。

会場の一角には写真コーナーを設け、嘗てのクラス毎の集合写真や、一高祭のスナップ写真を飾りました。高校時代の懐かしい思い出をたくさん引っ張り出すことができたかと思っております。

私達は世に云う団塊の世代で六十歳を目前にし、難しい岐路に立たされている仲間も多く居る事と思われます。しかしそれらを瞬時に払拭してくれたのは同窓会です。今回の出逢いを次回の同窓会に継いで行きたいと思っております。

翌日は進修同窓会主催の記念式典に三十名を超える仲間が出席し、同窓会本部より祝賀を受けました。本部の関係者に深い感謝の意を表したいと思います。

最後に実行委員そして参加してくれた同窓生全員の協力により記念同窓会が成功裡に終了できた事に感謝を申し上げます。「皆、集まってくれて有り難う!またこの次も会おう」

(高二十回卒　渡邊俊樹)

卒業二十五周年を迎えて

去る四月十二日、卒業二十五周年を記念し、我々全日制普通科三十五回生・理数科十二回生は学年全体での記念同窓会を開催いたしました。同級生の多くは卒業後各方面へ散らばっているため、地元に残っている有志を中心に、約三十名の幹事団を結成し一年の準備期間を経て、満を持しての開催でした。

当日は懐かしい顔ぶれが続々と集結し、中には一目見ただけでは誰だか分からない人や学生服を着せたらそのまま二十五年前にタイムスリップしてしまうような相変わらずの人もいて、一言では表現できない感動がこみ上げてきました。

開会に先立ち記念撮影を行いました。雛壇に並んで待っている同窓生の集団へ恩師の先生方をご案内すると、大きな拍手と歓声が沸き起こりました。恩師の先生方全員にご出席を賜り、総勢百六十五名による大同窓会を開催することができました。

副幹事長の井坂雄祐による開会の言葉から始まり、幹事代表として私がご挨拶を申し上げました。亡くなられた岡野校長先生や海野先生、また四名の同級生に黙祷をささげ、早すぎる不幸を悼みました。続いて、事務局の説田賢哉が会費の内訳や母校への寄付金について説明した後に、当時の学年主任である上木先生からご挨拶をいただきました。上木先生の語り口は二十五年前と全く変わらず、当時の授業風景が会場に広がったような気がいたしました。乾杯の音頭は、高校時代から現在まで同級生のアイドル(?)としての地位を守り続けた浜田(現姓中野)が発声し、同窓会の幕が切って落とされたのです。中根(現姓菱田)千枝の名司会により同窓会は徐々に盛り上がりを見せて、アルコールの摂取量と共に皆のボルテージも上がっていきました。

恩師の先生方や同級生との歓談の時間はあっという間に過ぎました。アトラクションとしては、クラスごとに演壇へあがり、担任の先生を囲んで当時の思い出話を披露したり、先生方の近況をお話していただいたりというクラス報告を行いました。先生方への記念品贈呈も終了し、校歌を皆で合唱する頃には予定した時間一杯となり、いつの間にかお開きの時間となりました。クラス会の話がまとまったクラスもあり、またの再開を約束して一次会の終了となりました。

翌十三日の同窓会総会、祝賀式、祝賀会には周年学年の一つとして招待を受け記念品をいただきました。この様な機会を設けていただきました同窓会本部の方々には深く感謝いたします。今後も同級生一同、母校の発展及び進修同窓会の発展のために寄与していければと思っております。

また、同窓会の準備にあたって色々とお世話をいただきました諏訪原先生にはこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。

(高三十五回卒　塚本一也)

定時制部会と総会

平成二十年度定時制部会は役員の改選がありました。長く会長を努められ学校、部会のために親身になって貢献された柳沢正男会長が健康上の都合により会長職を辞退したいとの事でした。二度の役員会を開きこの機会に少しでも若返りを計りたいとの意見もあり、昨年文部科学大臣表彰を受賞した桜井光孝進修同窓会副会長の後任に草苅宏明先輩を選出しました。また桜井先輩には旧本館活用委員として定時制部会には柳沢先輩同様顧問に成って部会を見守っていただきたくお願い致しました。さて定時部会総会は例年通り四月十三日給食室において二十五周年、四十周年、五十周年該当者等三十余名の参加で総会の前に柳沢先輩、桜井先輩に花束贈呈し長年の労をねぎらいました。終りに先生方、職員の方、役員のご協力を頂き無事終了できました事、感謝申し上げます。

(定時制部会長　武石進)

同窓会副会長就任あいさつ

私は平成二十年四月十三日より桜井光

5面へ続く

惜別

平田公敏同窓会長のご逝去を悼む

平田公敏進修同窓会会長（併設中2回）が、去る六月十六日、取手協同病院において肝不全のため他界された。行年七十四歳。

氏は平成十四年に進修同窓会に監事として加わり、十六年には副会長、そして十九年四月、幡谷前同窓会長のあとを引き継いで同窓会長に就任。昨年度は前会長の残任期間であったため、この四月総会において改めて同窓会長に再任されている。

後に土浦一高併設中となる旧制土浦中に昭和二十一年に入学した氏は、土浦一高二年時に都立両国高校に転学。当時、難関国立大への進学といえば名門都立高が圧倒的だった時代、両国高もその一つで、氏も東大へ進まれた。ご卒業後、やがてご父君が経営する平田計理事務所を受け継がれるが、それからのご活躍は目覚ましく、一事業所の経営にとどまるものでなかった。温厚にして謙虚な人柄から、自然と地域や県内の同業界の取りまとめ役に推され、昭和六十年、関東信越税理士会茨城県支部連合会会長に就くや、平成元年には関東信越税理士会会長、さらに平成五年には日本税理士連合会会長と、業界トップの椅子を占めるに至る。全国の会長はもちろん関東信越の会長も県内の税理士としては氏が初めての就任であったと聞く。大蔵省国税審査会委員・法務省法制審議会委員（ともに平成五年）や政府税制調査会委員（同九年）等々つとめた顕職は数えだしたら枚挙にいとまがないほどである。

税理士功労により、平成五年には藍綬褒章を、同十五年には旭日中綬章を受章されている。

生得の仕事人間で、同窓会長に就かれてからも、長い間の厚い信頼関係に結ばれた多くの顧客を擁する計理事務所の経営と、平成十二年からつとめている県の監査委員は、ご入院の少し前まで、たゆむことなく現役として仕事を続けておられたという。

このような多忙な日々を送られていたにもかかわらず、進修同窓会支部会、役員会等の活動にも熱心に取り組まれ、今年度当初の進修同窓会ホームページ上でも、同窓会と母校のために力を尽くす意気組みを力強く披歴されておられた矢先の急逝であり、残念でならない。会員一同心からご冥福をお祈りするばかりである。

元副会長、元校長

横田尚義先生ご逝去

（行年八十一歳）

横田尚義先生には、九月十八日、動脈瘤にて急逝されました。

三年ほど前に体調を崩され、以後定期的に通院されておられましたが、当日朝、テレビをご覧になっていて病状が急に悪化されたそうです。

先生は太平洋戦争末期の昭和二十年旧制土浦中学校第四十四回生として卒業、直ちに海軍兵学校に入学、間もなく終戦となり、翌年、東京高師に編入学、物理を専攻されました。同校卒業後、石岡二高に二年間勤務された後、昭和二十五年四月に本校に就任されました。以後、教諭として二十六年、HR担任をはじめとして、教科は理科、校務分掌は教務、部活動はヨット部を担当、それぞれの分野でご活躍、大きな成果を残されました。

また、学年主任、教務主任としての力量が認められ、教頭に昇任し、五年間勤められました。その間校長を助け、本校が進学校として大きく飛躍する基盤づくりをされました。

その後、筑波高校校長に昇任して一年、さらに竹園高校へ転出、第二代校長として四年間勤務されました。

そして昭和六十一年に再び、本校第二十一代校長として着任、二年間勤務され、創立九十周年事業を実施されました。

県立高校退職後も私立の東洋大学付属牛久高校の校長として六年さらに茗溪学園理事を勤められ、私学教育振興にも貢献されました。

これら長年にわたる教育界での功績により、平成十年春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章されました。

同窓会関係では、本校校長退職後十九年間副会長として、本会の発展に努められました。特に創立百周年記念事業では、記念誌編集委員長を務め、また実質的な事務局長として、記念事業の推進に大きな役割を果しました。

先生は温厚誠実で心が広く、生徒、教職員、保護者、本会会員の誰からも信頼されました。

この度の先生のご逝去は、本会員に適切なご助言をいただける方を失ったと言う点でも、大きな損失であり、残念でなりません。

今後は先生が残された数々の教訓を同窓会活動に生かして行きたいと考えています。

4面からの続き

孝様の後任として、副会長に替わりました定時制第十回の草苅宏明です。浅学非才ですが宜しくお願い致します。

定時制も開校六十年に成ります。県下でも類を見ない発展ぶりです。校長先生はじめ諸先生方の努力の賜と感謝致しております。定時制部会も本会よりの補助を頂き教育活動全般特に定通大会においては活発に活動できている様子です。

私は土浦市港町三丁目に住んで居ります。会社・工場は、つくば市赤塚に有ります。昭和三十年開業当初はいづれも土浦市荒川沖でした。定時制も荒川沖から四年間通い、どうにか卒業することができました。当時からすると照明や、食事給食等、だいぶ環境が良くなり喜ばしいことだと思っています。私は木を加工して製品を造ることを生業として居ります。「創造と気配りは品質と安全を高める」を社是として企業運営をしてきました。無の物を創出させるには、相手を思う気配りが必要であり、安全にもつながります。

今後も諸先輩のご指導を受けながら本会の発展に微力ながらお役に立ちたいと思いますので宜しくお願い致します。

卒業生レポート ⑬

「Tジェネラリストを目指そう」

東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻准教授
西成活裕
高三十七回（昭和六十年卒）

私が一高を卒業して、もう20年以上が経つ。入学してから数えると、ちょうど今年で25年。この四半世紀という年月の経過には自分自身でも驚いてしまうが、なぜか今でも一高時代の生活は鮮明に覚えている。サッカー部に所属し、暗くなるまでボールを追っていたこと、友人と夜遅くまで微積分の問題を議論したこと、一高祭でシブガキ隊に扮して踊ったことなど、何もかもが懐かしい。

私は高校生のとき、40代の男性に対して持っていたイメージとは、疲れている中年オヤジ、というものだった。しかし実際に自分がその年齢になってみると、決してそのようなものでなく、むしろ「やる気」は昔よりも強いと感じる。しかも知的好奇心は全く変わらなく持ち続けている。とにかく新しいもの、知らないものを見ると昔も今もワクワクするのだ。サッカーボールをあちこち追いかけるように、これまで私は興味があればどんな分野の研究でもしてきた。その時はただ興味本位で色々な分野を渡り歩いていたが、それが不思議なことにだんだんと一つの焦点を結んできたのだ。そして最近、「渋滞学」としてこれまでの研究を統合し、理学と工学、そして文系科目までも融合した新しい学問を作ることができた。その内容の詳細は、「渋滞学」（新潮選書）という一般向けの本を書いたので、そちらを参考にしていただきたい。ここでは、今までの研究生活を通じて感じてきたことの中で、特に高校生の時に私が聞いていたらプラスになったと思われることを2つばかり述べてみたい。

まず勉強と研究の違いについて話そう。高校を卒業して大学に入っても、しばらくは勉強が続く。いつまで勉強するのか、という問いに対しては、一生勉強し続ける、というのがある意味で正解だろう。しかし勉強した成果を社会に還元していくのが研究というステップなので、ずっと勉強をしているだけでは、吸い込んでばかりいる掃除機のようで良くない。そこで、ふつうは基礎ができあがる大学4年生、大学院1年生ぐらいから勉強と同時に研究も開始する。ここでやっと個性が発揮されてきて、将来に研究者として伸びる人と伸びない人がだんだんと別れていく。そこで周囲を見渡して、成功している研究者はまずどういった勉強の仕方をしていたのかを調べてみた。すると、何事も自分で論理的に考えて理解し、そして理屈なしの丸暗記というものは決してしない、という人が多い。したがって、教科書を鵜呑みにせず、批判的に考えている。実際に教科書は説明を簡略化するために色々ごまかして書かれている。そして、この批判的態度で勉強してきた人は、研究に比較的スムーズに入っていくことができる。しかしそれでも勉強と研究のギャップは大きい。

勉強は、もちろん必ず正解があるものばかりだが、研究においては正解などない。正解とはもともとは誰かが昔に考え出したものだが、研究ではまだ世界の誰も答えを見つけていない問題を考えなくてはならない。そして、何か答えを思いついたら、自分で世界に向かってこれが正解だと主張しなくてはならない。それが世界で認められれば正解になり、このプロセスこそが研究だ。したがって、勉強に比べて、研究はスピードは遅く、試行錯誤が必要で非効率的なものだ。スイスイと教科書を読んできた人にとって、研究のこのスローさが耐えられず、挫折する人も多い。しかし我々でもうまくいくのは1年のうち、4、5日しかない。残りの360日は暗中模索をしているのだ。したがって、研究で成功するタイプとは、とにかく粘り強く、自分を信じ、勇気があり、そして楽観的な人だ。逆に否定的な考えの人やあきらめが早い人はあまり研究者に向かないと思う。私のゼミでも、学生に言い聞かせていることがある。それは、うまくいかないときが研究の最大のチャンスなので、ダメだと分かっても3ヶ月は粘れ、ということだ。

もう一つは、勉強、あるいは研究したことは、すべて無駄にならない、ということだ。私も高校時代に受験に関係ない生物を勉強したときは、時間の無駄だと思っていたが、これが今から4年前に偶然にも役立って、その結果、物理学では世界一の専門雑誌に私の論文が掲載されたのだ。大学時代も興味があることは何でも勉強してきた。教養課程では、専門基礎の数学や物理学以外にも、経済学、心理学、哲学などを熱心に勉強してきたが、これらすべてが現在の渋滞学の構築に大いに役に立っている。もちろん専門性を極めることをおろそかにしているわけではない。私が大学院の博士課程まで最も一生懸命勉強したのが、数理物理学という分野で、これは数学と物理学の中間に位置する基礎学問だ。結局博士号は数理物理学に関する研究だったが、とにかく持ち前の好奇心から、他分野の講義もかなり受講した。

ここでタイトルにある、Tジェネラリストを説明しよう。これは、深さと同時に他分野への横の広がりも持つ人のことを意味する。専門家（スペシャリスト）は一つの分野を掘り下げるため、文字でいえば「I」、そして幅広く知っているだけで深みはないクイズ王は横棒「一」だ。この中間をTジェネラリストと呼ぶ。

現在の大学教育は、I型の高度な専門性を持つ人を育てることには成功している。しかしこれから我々が解かなくてはならないのは、環境問題、格差問題、食料問題など人類の行く末を左右する大問題だ。こうした諸課題は、「問題は内側にあり、解決策は外側にある」といわれる。一つの分野の専門家ではもはや解決できないのだ。そのため、専門を深く細かく掘り下げるだけの大学教育を根本から見直さなくてはならない時期に来ている。そのときに求められるのが、Tジェネラリスト型人間で、タコつぼの専門家でも、ただのもの知りクイズ王でもない。理系文系問わず勉強し、かつ専門性も身につけているTジェネラリストだけが世界を俯瞰でき、深い洞察力で複合した課題を解きほぐしていけるのだ。ぜひとも高い能力を持った皆さんには、将来このような人になってほしいと願う。

【略歴】
1967年東京生まれ。
1995年に東京大学工学系研究科航空宇宙工学専攻博士課程終了後、山形大学工学部に4年、龍谷大学理工学部に6年勤務、2002年から1年間ドイツのケルン大学理論物理学研究所にて客員教授。2005年より東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻准教授。著書「渋滞学」（新潮選書）が講談社科学出版賞および日経ビズテック賞をダブル受賞。日本テレビ「世界一受けたい授業！」などに出演するなど、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などで幅広く活躍。

支部だより

真壁支部

旧真壁町（マチ）は、長らく真壁郡の中心的な町であった。が、平成の大合併で3年前の平成17年から真壁郡は「桜川市」と「筑西市」の二つに分かれた。また、昭和29年以前の旧旧真壁町（マチ）は、桜川市真壁町（マカベチョウ）となった。

進修同窓会真壁支部総会はかなりの間開かれていなかったようだが、平成13年6月に旧制土浦中学第43回卒の林雄氏が会長に就任して復活した。

元々旧真壁郡出身者で構成されていた「真壁郡友会」がその母体と言われる。

現在「進修同窓会真壁支部会員」は、規約で次のようになっている。即ち

・真壁地区から旧制土浦中学及び土浦第一高等学校に、入学し卒業したもの。

・他地区から同上校に入学し卒業した後、現在旧真壁郡地区に在住するもの。

したがって、旧制の土浦中学校卒業者から始まり今平成20年の土浦一高卒業までのすべての人たちが会員となっており、総数３４０名（内58名物故）にのぼる。

復活した進修同窓会真壁支部総会は平成13年に再開されて以来、同15年、同17年と本20年の4回、いずれも6月に旧真壁町の町内で開かれている。（開催の原則は、会員が全国規模のため規約で3年ごとになっている）

開催時には母校の校長先生に来賓としてご出席願い「土浦一高の現況」についてお話いただいている。なお、総会のメインイベントは参加者全員の現況報告（結構時間がかかる）で、お互いの無事を確かめながら旧交を温めている。

今年は真壁に関係のある歴史的な話題を、市役所生涯学習課に席を置く学芸委員・寺崎大貴（タカヒロ）さんに特別講演してもらった。

テーマは「関東の関ケ原と真壁」であった。これは来平成21年ＮＨＫ大河ドラマでの主人公：直江兼続（カネツグ・・上杉謙信、景勝親子の臣）と大いに関係あったものだけに、たいへん意味深いものだった

この特別講演はアトラクションにもなるため、今後とも続けて行くつもりでいる。

総会では当然ながら報告・議題などあって盛り沢山。午前11時から昼食を挟んで行っているが、いつも時間が不足気味で世話役は時間調整に苦慮している。

また、今次総会で林会長は引退されて顧問となり、代わって土浦一高第2回卒の田崎次男氏が就任した。次回開催は3年後である。

総会では母校の発展を祈りつつ進修同窓会真壁支部会の一員であることに多大の誇りを確かめ合っている。それゆえに、会の存在が後に続くものへの刺激となり、ひいては地域教育の振興に資すればと願っている。

立地条件の厳しい中にあっても、今後とも諦めず後輩の続くことを強く期待しながらこの会の永続することを願うや切である。

（真壁支部事務局）

牛久支部

牛久支部は、12年程前に発足したものの諸事情で長い間休眠状態が続きました。有志から再出発の要望を受け、6月8日（日）総会を開催することが出来ました。年齢的に出席可能な方を対象に実施した結果、約30名が参加、本部関係から副会長青山和義様、豊崎利明教頭先生をお迎えし、同窓会活動や教育現場の実践活動の報告を受けました。議事も滞りなく進行・承認され再出発することが出来ました。その後、懇親会に入り、お互いに懐かしい方、初めての顔を合わせる方々が思い出話や情報交換など楽しい雰囲気の中で交流を深め有意義に過ごすことが出来ました。

最後になりましたが、本部・各支部のご協力やご指導をいただきながら、さらに充実した組織で活動を進めたいと考えております。

牛久支部　大谷　進

中38回生より同窓会本部宛ご寄附

先般、中38回生を代表して、幹事の菊田正夫氏が来校され、同窓会本部宛八四、〇九二円のご寄附をいただきました。中38回は毎年同窓会を開催してきましたが、近年高齢化による会員の減少から参加者が十数名前後となってしまいました。このことで話し合いをした結果、会を解散することになりました。解散にあたり、会の運用資金の残金の処置についても協議したところ、同窓会本部へ寄附することに意見が一致したということです。御芳志ありがとうございました。

平成二十一年度　進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日　平成二十一年四月十二日(日)　午後一時

二、会場　土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年　中四十八回　高一回
卒業五十周年　高十一回　定九回
卒業四十周年　高二十一回　定十九回
卒業二十五周年　高三十六回　定三十四回
卒業十五周年　高四十六回　定四十四回

一般会員・周年記念会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

お知らせ・話題

幡谷祐一前会長・顧問「旭日中綬章」受章

今年春の叙勲に際し、茨城県信用組合理事長幡谷祐一氏(中40回)が旭日中綬章を受章されました。これは長年にわたり、中小企業振興をはじめ治安関係など多くの分野において、たゆまぬ努力を重ねられた功績が高く評価されたものです。これまでにも、交通栄誉緑十字金章、暴力追放栄誉金章、茨城県特別功績章など数多く受章されておりますが、今回の受章はこれらの集大成と考えられます。

皆様ご存じのように幡谷祐一氏は昨年の総会まで十八年間進修同窓会長として、創立百周年記念事業の実施、土浦一高讃歌の作成など、本会及び土浦一高の発展に多大の貢献をされた方です。この栄えある受章は本会及び会員にとりましても大きな誇りであり、喜びであります。この件につきまして、去る六月二十二日大洗パークホテルにて、茨城県知事、国会議員をはじめ、各種団体の関係者等多数が参加して、盛大な祝賀会が開催されました。本会からは顧問の村松校長と大曾根、青山、長瀬の三副会長、木島本部幹事、同窓の梅澤前監事が出席しました。

七十で漢詩の勉強を始められるやこれまでに著書も四冊出版、昨春は八十三歳にして筑波大学大学院に入学され、また水戸市と協力して廃油再利用によるエタノール燃料精製の研究に取り組まれるなど、学習意欲が大変旺盛であられ、今なお現役で、末尾で紹介いたしますが、全国信用協同組合連合会の会長はじめ多くの役職をつとめておられます。すでに百歳宣言をなされていて、今後も多方面にわたる益々のご活躍が期待されています。なお、今回の受章を記念して、水戸市社会福祉協議会へ一千万円のご寄附をされました。

◎現在の役職等

茨城県信用組合理事長、(財)幡谷教育振興財団理事長、茨城トヨペット㈱会長、トヨタ部品茨城共販㈱会長、富士菱石油㈱会長、全国信用協同組合連合会会長、(社)茨城県安全運転管理者協議会会長、(財)茨城県暴力追放推進センター理事長、茨城県来日外国人不法滞在不法就労防止対策協議会会長、茨城防衛協会会長、茨城県自衛隊除隊者雇用協議会会長、(財)水戸市国際交流協会理事長、茨城県中小企業団体中央会会長、茨城県行財政改革推進懇談会会長、米国カリフォルニア州アナハイム市名誉市長

「難民を助ける会」理事長に長 有紀枝さん(高34回)

日本のNGO(非政府組織)の草分けの一つとして知られる「難民を助ける会」(AAR、東京)理事長に、この七月、長有紀枝さんが就任した。

AARは79年、母国の戦禍を避けて日本に来たインドシナ難民を救おうと立ち上げられたが、特に力を入れてきたのは地雷の廃絶で、これまでに50カ国以上で難民のほか障害者や地雷による被害者を支援、現在も10人以上の駐在員らが各国で働いている。

長さんは、87年、早稲田大学政治経済学部政治学科卒業後外資系企業に勤務、90年に「難民を助ける会」でボランティア活動に入り、翌年から専従職員に。以来、カンボジア、旧ユーゴスラビアなどで難民支援にあたり「地雷禁止国際キャンペーン」(ICBL)を通して世界中のNGOと信頼関係を築いてきた。この間にも、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程を修了、ボスニア紛争時の支援経験をもとに、07年には博士号を取得。東京大学大学院・青山学院大学大学院・早稲田大学でそれぞれ非常勤講師もつとめていて、NGO「ジャパン・プラットフォーム」代表理事や内閣府国際平和本部国際平和協力研究員選考委員も兼務している。

理事長就任にあたって、長さんは「設立30年の節目を前に理事長を受け継ぎました。現場での活動を生かして、自分たちの言葉で問題を発信し、政策提言もしていきたい。支援活動を通して日本の社会に風を起こす会の原点は受け継いでいきたい。」とその抱負を述べている。

なお、著書には『地雷問題ハンドブック』(自由国民社97年刊)などがある。

憧れ～現実～未来

東大野球部1年生からのメッセージ

山越　徹(高59回)

私は1年の浪人期間を経てこの春東京大学に入学し、硬式野球部に入部しました。私が東京大学で野球をやりたいと考えたきっかけは、東京六大学リーグで活躍する土浦一高の先輩の存在です。近年では杉山敦先輩(現在三菱商事)が慶應義塾大学の主将として活躍し、現在では東京大学に井尻哲也先輩(4年)と増田憲司先輩(4年)が所属しており、井尻先輩は主将でもあります。二人の先輩方が色々と気を使ってくれたため、すぐに部に溶け込むことができました。今現在東京六大学野球リーグは秋のリーグ戦最中ですが、今シーズンで四年生は引退してしまうため、一緒に野球ができる残り少ない時間を大切にしていきたいと思います。土浦一高で私の代の主将であった内海翔太君も私と同じく今春入部しており、先輩方が引退された後も土浦一高出身部員として、彼と共により一層励んでいきたいと思います。私の代には、早稲田大学野球部の塚原鉄平君もおり、励みになっています。

近年、東京大学はリーグ戦の勝ち点を挙げることができず、最下位が定位置となってしまっています。その一因として人材不足が挙げられます。「東大で野球をやっても勝てない」と思われているため、有望な受験生が他大学へ流れてしまっているのです。こうした現状を変えるためにも、私たちが頑張って六大学リーグ戦で勝てるようなチームを作り上げ、いずれは高校生に「東大で野球をやりたい」と思われるようにしたいです。私が先輩方に憧れて東京大学へ進学したように、私もいつか後輩に背中を追われるような存在になりたいと思います。

母校だより

―第六十一回一高祭―
一高祭を終えて

一高祭実行委員長 三年　向原　茉莉江

5月29日の前夜祭を皮切りに、5月31日と6月1日に一般公開を実施し、無事に文化祭を終えることができました。今年の文化祭のテーマ【煌】に象徴されるように、ひとりひとりが活躍できる場をなるべくたくさん創ることを意識し、学校一丸となって取り組みました。

しかし、その道程には委員不足などの様々な障害があり、本番までに完成させられるのかさえ心配な状況でした。そんな状況の下で、私たちにとっては決して忘れられない文化祭が成功できたのは、生徒、委員のみんなはもちろん、先生方や保護者、近隣の方々の協力があったからに他なりません。心から感謝しております。

ところで、このような文化祭を築き上げるにあたって一つ思い至ったことがあります。それは、「一高の生徒ひとりひとりの可能性」ということです。一高祭を通して様々な人と関わることができましたが、そのひとりひとりが他の人には真似のできない側面を必ず持っていました。それは何度も身をもって感じたことです。国際的な視点から、日本人は没個性的なイメージで見られがちですが、それはどうも視野の遠近の問題であるような気がします。

その人の場所に一歩踏み込んでみれば、あるいはその人が一歩踏み出せば、見えてくるのは唯一でかけがえのない「その人」という存在です。若さゆえにまだ未熟であるという点と同時に、将来への大きな可能性が秘められています。

私が感じたその「可能性」。私はそれこそまさに「煌」という言葉がふさわしいのではないかと思いますが、それはまだ芽吹きの状態です。芽を開花させるのは今後のそれぞれの道のりにかかっています。そして、私たちは自分たちが思っている以上にまだその道の歩き方が不器用です。ですから、一高祭を経験して周りの支えと関わりの大切さに多くの人が気付くことができたら、それこそまさに今回の一高祭が「成功」と言えるのでしょう。

一高祭（広場）

職場訪問を終えて

二年　小西　洋輝

二〇〇七年入学の私達の学年は、一年次に「職場訪問」と題して、東京やつくばの企業・研究所を訪問しました。十人程度のグループを作って、午前午後で一カ所ずつ回りました。全体では、実に五十以上の企業・研究所にご協力いただきました。また、土浦一高出身の先輩方に多くご助力をいただきました。ありがとうございました。

私は、午前、新日本監査法人を訪問しました。ここでは、監査や監査法人についての説明を受け、実際の職場を見学しました。この訪問で、私達は社員の方々の詳しい説明の下、監査というものを理解することができました。会社が社会に対し仕事を評価してもらうには、監査が不可欠だといういうことを知りました。

また、午後は株式会社リクルートを訪問しました。この訪問の前に、私達には10分程度のプレゼンテーションをすることが企業側から課されました。訪問日までに、私達は皆で意見を出し合いコンセプトを決定し、分担してスライドを作り発表の準備を重ねました。当日そのプレゼンに対して、拙いものであったにもかかわらず、社員の方々から的確で懇切丁寧な批評をいただきました。この作成や発表、批評をいただくことで、自分たちにはまだ「社会で求められる力」が足りないことを痛感しました。

この職場訪問を通して、私達は様々なことを学びました。そして、私達を温かく迎え、育てようという先輩方の熱意が伝わってきました。その思いに感謝し、そして研鑽を積んで現代社会を支える一員になろうと強く決意しました。

職場訪問（あずさ監査法人）

「入門合宿と生きがい探し」

一年　笠原　路子

植物を育てるときに、一本だけを植えるよりも二・三本並べて植えたほうが良い、と母から聞いたことがある。お互い競い合うようにぐんぐん成長し、一本で育てたものとは一味違う花を咲かせるそうだ。

もう一つ、例を挙げようと思う。中学校の体育の時間のことである。二つのレーンを使って百メートル走のタイムを測るとき、先生から「自分より少し早い人と一緒に走るとタイムが伸びるよ。」と言われた。半信半疑で実行した友人たち何人もが大幅にタイムを上げていた。

「競う」という言葉は一見マイナス的なイメージを与えるかもしれない。しかし、競うことによってそのものの能力は飛躍的に伸びると私は思う。言い換えれば、競うことによって私たちは「現在の自分」を超えようと努力し、進化していくのである。

「ここ土浦一高には『競える』環境がある。」これが、今回の合宿で感じた大きなことだ。テストの順位、自由時間に自主的に勉強を始める人の多さなど、中学とは全く違う雰囲気に驚かされた。同時に、お互いに高めあって努力できる人がたくさん居ると感じた。

ところで、合宿二日目の元校長大貫先生の道徳講話の題目は「青春をどう生きるか。」だった。

しかしとても難しい問いである。しかし先生の、体験談などを交えた丁寧なお話しを聞いて、人生を送る上で大切なことを教わることができた。「生きる目的」を見失わない、ということだ。

では、今の自分にとっての生きがいは何だろう。考えてみても、浮かぶことは何も無かった。私は具体的な将来の夢があるわけでもなければ、これだけは負けないという自信のあるものがあるわけでもない。そんなとき、ある一高生が声をかけてくれた。

「ホントにやりたいことなんて十六年しか生きてないんだから、分らなくて当然だよ。この先やりたいことを見つけたときのために、どこにでも行ける力をつけるのが今だろ？」

この言葉は強烈な印象とともに心の支柱となった。将来を見据えた生きがいが見つからないのなら、今目の前にあることを精一杯やればいい。まだ入学したばかりだ。頑張れることはいくらでもある。

「鍛える友」「支えあえる友」両方に恵まれた環境に居られる喜びを胸に、また、このような環境を築いてくださった先輩方や先生方、その他沢山の周りの人への感謝を忘れずに、仲間達と協力して最高の高校生活を送りたい。

共宿

職員室だより

数学科より

中川　功一

我々数学科は、十名おります。飯嶋（本校十九年目・コンピューター室長）、中川（八年目・数学科主任）、杉田（四年目・一年主任）、久保（五年目・二年担任）、菊池（十二年目・三年主任）、酒井（十一年目・三年担任）、幕内（六年目・一年担任）須藤（二年目・一年担任）、細矢（三年目・三年担当）、須田（二年目・二年担任）です。これに村松校長、松延教頭、豊崎教頭も数学科ですから、合わせて十三名です。

さて、数学科職員室の雰囲気をご紹介いたします。先ず、常に明るく、皆健康で和気藹藹としております。毎朝出勤すれば、互いに挨拶を交わし、天気や時事問題などを語らいます。授業へは、チャイムの数分前に行き、空時間の教員は教材研究に勤しみます。授業から戻れば、その時々の生徒の様子を告げ、授業の仕方を検討し、また教材について討議します。

また、休み時間・昼休み・放課後には、質問に来る生徒に対して、或いは懇切丁寧に、或いは的確な示唆を与えるなど、生徒の個性や到達度に応じた指導を行っております。

このように休み時間・昼休み・放課後を問わず、常により良い教材・より効果的な指導を目指して生徒の教養・知力の向上に努めております。

さらに村松校長は、夏季の三年生数Ⅲ特別講座を実施、考査毎に両教頭が問題についての難易・適不適の講評を告げてくれ、我々の教科研究に協力を頂いております。

このように、述べますと、やや堅苦しい雰囲気ですが、冒頭に述べたように、和気藹藹としています。その源は、数学科独自の年中行事にあります。年度当初の歓送迎会、夏季の旅行、秋の紅葉狩り、新年会など、行事が充実しており、そのつど互いの人間全体の研修を行い、明日の教育への活力を養っております。

同窓会の先輩諸兄のご期待に沿うべく、数学科一同将来を担う生徒の育成に尽力して参る所存であります。今後とも宜しくお願いいたします。

事務室から

「はい、土浦一高です」「こんにちは」本校に電話がかかってきたり、お客様がいらっしゃったりすると、真っ先に私たち事務職員がにっこり明るく応対します。事務室は、外部のお客様と最初に接する、いわば本校の『顔』のようなところです。

そんな事務室に足を運ばれた方は、女性の多さに驚かれたこともあるのではないでしょうか。私たち事務職員は、事務室長（高十九回）を含め全七名（内一名育児休業中）ですが、室長以外はすべて女性で構成されていて、とても華やかです。

私たちは、電話や窓口での応接の他にも、授業料の徴収や在校生卒業生への各種証明書発行、教職員への給与支給、物品の購入、施設の修繕管理等の仕事を分担し行なっています。これらを適切に処理することを通して、教職員や在校生たちが快く授業したり、学校生活を送ることが出来るようサポートしています。事務室は、本校の『顔』でもあり、また『縁の下の力持ち』でもあるのかもしれません。

私たちは、今後とも事務処理の適切な執行に励み、皆さまを支えていけるよう、そして、明るく笑顔あふれる事務室であり続けられるよう努めてまいる所存です。

◇　◇

旧本館校舎（国指定重要文化財）の復元教室をＮＨＫＴＶが撮影し、二十一年一月十日特集ドラマ「白洲次郎」のわかき日の旧制中学校授業風景及び同年十一月より三年にわたるスペシャルドラマ「坂の上の雲」の少年時代の海軍兵学校の日々風景などが放映されます。ご覧下さい。

部活動報告

生徒指導部

大塚　健司

日頃より本校の部活動に対しまして、ご理解とご支援を賜り有難うございます。

最近の部活動に関する全国的傾向を概観致しますと、高校生の部活動への加入率は低下しております。理由は、学習との両立の難しさ、部費や用具類購入費用の家計への圧迫、中学校における猛練習の反動、さらには今日の「現代っ子気質」などが考えられます。その影響は、部員数の減少、特に高体連の各専門部及び各種協会における財政難のほか、「助っ人」や合同チームに頼らざるをえないという状況に表れております。

こうした傾向の中にあって、本校の部活動加入率は、**表**のとおりとなっております。

全体の加入率は80・6％。この数字は年度当初と比較しても、殆ど変わりありません。前述の高校生を取り巻く諸事情からすると、驚異的な数字と言えます。この数字以外にも、一高祭などの実行委員を務める生徒も多いことから、本校の生徒たちが特別活動に積極的に取り組んでいることが窺えます。しかし大切なことは、部活動を通していかに心技体を鍛えるか、いかに健全な上下関係や友人関係を育むかですから、生徒たちにはさらにこうした意義を意識して、日頃の活動に精進してほしいものです。

次に本年度これまでの主な実績についてご報告致します。

◆ヨット部
大分国体ヨットセーリング競技
少年男子シーホッパー級
スモールリグ第五位　小野村英樹

◆囲碁部
文科大臣杯囲碁選手権県大会
男子団体戦優勝、全国大会出場
女子団体戦優勝、全国大会出場
男子個人戦優勝　藤間幸一
藤間が全国大会に出場。また永井香帆が全国総合文化祭の囲碁の部に出場。

◆サッカー部
高校総体県予選第三位
◆応援指導委員会
高校野球県大会「応援大賞」
◆合唱部
県合唱コンクール銀賞・加納賞
全国総合文化祭合唱の部出場
◆物理チャレンジ
全国物理コンテスト入賞
城下愛門　永井香帆
◆ソフトテニス部
関東高校選手権大会出場
小仁所志栞　河田悠
◆弓道部
関東高校個人選手権選抜大会出場　川原場　智

以上のように、本校生の活躍はとても立派でありました。これを刺激にして、さらに多くの部が活躍することを期待しております。

また、部活動のあり方に対してとかく世間の注目が向けられます。私たちは常に安全に配慮して適切な指導に努めていかなければなりません。今後ともご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

	1年		2年		3年	
	男	女	男	女	男	女
運動部	64.2	29.5	61.5	41.8	63.6	23.0
文化部	16.7	47.3	20.7	51.6	17.6	45.2
小計	80.9	76.8	82.2	93.4	81.3	68.1
学年	79.5		86.4		75.8	
全体	80.6					

表　（数字の単位は％）
1，2年は9月現在。3年は4月現在。

7月8日。ひたちなか市民球場における野球応援風景（全日本写真連盟会員安勝美さん撮影）

平成二十年度入試報告

東大26名・京大7名

文武両道で志望大合格果たす

進路指導部長　門井　了

平成20年度入試は、新課程3年目の入試になります。昨年度例年並みの難易度に戻ったセンター試験、今年度はまた易しくなり、文系7科目・理系7科目の全国平均点がそれぞれ12点、23点上昇しました。本校生の平均点も、文系が697点（昨年比＋16点）、理系が714点（昨年比＋24点）と上昇しました。センター試験易化に後押しされて、ほぼ第一志望での順調な出願をすることができました。

今春の入試結果について、特徴的なものを挙げてみます。

1東京大学26名（新卒15名）
2筑波大学49名（新卒37名）
3京都大学7名（新卒7名）

東京大学合格26名は岡崎、県立浦和、宇都宮、西高校に次いで公立全国5位、新卒15名は岡崎、宇都宮高校に次いで公立全国3位でした。筑波大学は総数、新卒生ともに全国1位でした。京都大学新卒7名合格は平成17年度入試の6名を上回り、調べ得る限り過去最高です。

本校生の難関国立大及び医学科志向は、今年度の入試でも続きました。東大、東北大、東工大、一橋大、お茶の水女子大、京都大、筑波大の7大学の新卒生の延べ受験者数は256名（昨年265）で、これは国立大延べ受験者総数383名（昨年392）の66・8％（昨年67・6％）にあたります。東大は延べ受験者数46名と昨年の60名から大幅に減りましたが、これは、前期挑戦も42名と少なかっただけでなく、後期が理科三類を除く全科類一括100名募集と縮小したことから前・後期通しての出願者が少なかったこと、またその大半が前期で合格したことによります。昨年より受験者が増えた主な大学は、東工大18名（＋4）、京都大12名（＋9）で、合格者は東工大が昨年と同数の4名、京都大が前述したように7名と過去最高でした。東北大は受験者46名、合格者15名で、ともに昨年並みでした。

地元筑波大が37名（現浪48名）合格で昨年より総数で3名、新卒で1名減らしましたが、全国1位は評価できます。国公立大学医学部医学科に限定すると、新卒生延べ45名が受験しました。昨年が39名、一昨年が44名ですから、依然医学科志向は顕著です。合格者は、筑波大に3名、山形大、山梨大、山口大、横浜市立大に各1名ずつ、合計7名が合格しました。うち推薦入試による合格は2名です。

私立大の総受験者数（新卒生・過年度卒生の延べ合計数）は昨年比1007名減の13552名、合格者数は57名減の627名、新卒生に限ると、受験者数が19名増の1007名、合格者数では60名減の333名でした。早・慶・上智の合計受験数は483名で昨年比89名増、合格数は52名減の78名でした。立教、明治、青山、東京理科、国際基督、東京女子、中央、法政、学習院、津田塾、日本女子11大学の受験者数は昨年比67名増の488名、合格者は9名減の182名でした。

本校は生徒を単に希望の大学に入れればよいとは考えません。将来にわたって伸び続ける生徒の育成を期して指導に当たっております。ご支援よろしくお願いします。

平成20年度入試合格状況

国公立大学

大学	合格者	新卒
北海道大	4	3
東北大	21	15
秋田大	1	0
山形大	1	1
茨城大	9	7
筑波大	49	37
群馬大	1	1
埼玉大	2	1
千葉大	7	7
お茶の水大	5	5
電気通信大	1	1
東京大	26	15
東京医歯大	2	2
東京外語大	3	2
東京学芸大	1	0
東京工業大	9	4
東京海洋大	1	1
東京農工大	5	4
一橋大	3	1
横浜国立大	4	3
富山大	2	1
山梨大	1	1
信州大	3	1

大学	合格者	新卒
静岡大	1	1
浜松医科大	1	0
名古屋大	1	1
京都大	7	7
大阪大	2	1
奈良女子大	1	1
神戸大	1	0
山口大	1	1
長崎大	2	1
鹿児島大	1	0
県立医療大	1	1
首都大東京	3	3
横浜市立大	4	1
岐阜薬科大	2	1
静岡県立大	1	1
国公立大計	190	133
（うち医学科）	（12）	（7）
防衛大	2	2
水産大	2	0
大学校計	4	2

私立大学

大学	合格者	新卒
青山学院大	20	14
学習院大	12	6
慶応大	52	22
国際基督大	3	3
上智大	17	11
中央大	27	13
津田塾大	9	5
東京女子大	11	6
日本女子大	18	13
東京理科大	111	62
明治大	65	27
立教大	42	23
早稲田大	87	45
法政大	18	10
北里大	10	6
芝浦工大	7	0
日本大	14	10
同志社大	3	1
立命館大	14	3
産業医大	1	1
その他	86	52
私立大計	627	333
合格者総数	821	468

平成19年度 進修同窓会決算書

収入額　一金　13,913,885円也
支出額　一金　9,876,759円也
差引残高　一金　4,037,126円也（平成20年度へ繰越）

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減(△)	備考
1	繰越金	3,212,212	3,212,212	0	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	30,000	△70,000	1名
3	年会費	9,000,000	8,690,000	△310,000	2,656名他
4	入会金	1,750,000	1,730,000	△20,000	新会員 計346名×5,000円
5	寄付金	0	250,000	250,000	下記のとおり
6	雑収入	88	1,673	1,585	預金利息
	合計	14,062,300	13,913,885	△148,415	
	ご寄付者名	高9回卒業生ご一同様　高34回高理11回卒業生ご一同様			

【支出】

	項目	予算額	決算額	残額	備考
1	総会補助	850,000	962,975	△112,975	総会資料、会場設営等
2	会報発行費	3,500,000	3,207,390	292,610	会報印刷、発送
3	通信費	100,000	78,330	21,670	切手、はがき
4	卒業記念品費	150,000	136,000	14,000	卒業証書用丸筒
5	卒業60,50,40,25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	200,000	148,305	51,695	役員会、評議員会等経費
7	支部連絡費	300,000	200,000	100,000	支部会補助
8	生徒奨励費	2,000,000	1,460,000	540,000	生徒会補助
9	生徒活動補助費	2,000,000	105,680	1,894,320	つくば美術館賃展示室使用料
10	別途積立金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立金会計へ
11	慶弔費	100,000	16,380	83,620	
12	事務局費	900,000	880,164	19,836	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	1,920,000	670,535	1,249,465	県外視察、パンフレット印刷等
14	予備費	642,300	611,000	31,300	卒業周年記念品印刷費、祝賀学年事務補助
	合計	14,062,300	9,876,759	4,185,541	

上記のとおり決算しました。
平成20年3月31日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　幡谷　祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。
平成20年3月31日
監事　梅澤　正之進　印
監事　田嶋　栄吉　印

平成20年度 進修同窓会予算書

収入額　一金　14,888,700円也
支出額　一金　14,888,700円也
差引残高　一金　0円也

【収入】　単位：円

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1	繰越金	4,037,126	3,212,212	824,914	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	100,000	0	
3	年会費	9,000,000	9,000,000	0	
4	入会金	1,750,000	1,775,000	0	350名(全320・定30)×5,000円
5	雑収入	1,574	88	1,486	預金利息
	合計	14,888,700	14,062,300	826,400	

【支出】

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1	総会補助	1,000,000	850,000	150,000	資料、会場設営等
2	会報発行費	3,500,000	3,500,000	0	会報印刷、送料
3	通信費	100,000	100,000	0	切手、はがき等
4	卒業記念品費	150,000	150,000	0	卒業証書用筒
5	卒業周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	200,000	200,000	0	役員会、評議員会等経費
7	支部連絡費	300,000	300,000	0	支部会補助
8	生徒奨励費	2,000,000	2,000,000	0	生徒会補助、進路指導助成
9	生徒活動補助費	2,000,000	2,000,000	0	部活動補助
10	別途積立金	1,600,000	1,000,000	600,000	積立会計へ
11	慶弔費	100,000	100,000	0	
12	事務局費	900,000	900,000	0	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	1,970,000	1,920,000	50,000	別添内訳のとおり
14	予備費	668,700	642,000	26,400	
	合計	14,888,700	14,062,300	826,400	

※項目間の流用を認める。

「Acanthus」の発行

同窓会旧本館活用委員会ではかねてより、一般公開時の弦楽部のミニコンサートや写真部の作品展など、旧本館を現役の生徒諸君にも利用してもらうような取り組みを進めて参りました。本年度はさらに、百十余年の長い歴史を有する本校の過去の姿や旧本館に関心を深め、進修同窓会への認識を強めてもらおうと、生徒の啓蒙活動を始めました。その手始めとなったものが生徒向けパンフレット「Acanthus」の発行です。

A4一枚の簡単なチラシ風のものですが、毎月1回テーマを決めて発行しており、生徒諸君や先生方にも好評のようです。創刊は新入生歓迎号として、明治期の土浦中学校入学試験の様子を紹介しました。創立記念日のある4月には、本校の創設の経緯を特集し、一高祭の時期6月には、明治39年の大運動会のヒョットコ事件を取り上げるなど原則として学校行事に合わせる形で編集を進めています。

現在は、全校生徒・教職員へ配布していますが、将来に向けては、保護者や同窓会支部会などを通して卒業生にもと考えています。なお、表題の「Acanthus」は、旧本館の装飾に多用されている多年生植物アカンサスから採ったものです。

土浦一高
電話　〇二九-八二二-〇一三七
FAX　〇二九-八二六-三五二二
ホームページアドレス
http://www.tsuchiura1-h.ed.jp

会費納入のご協力とお願い

平成十九年度の会費納入状況は、平成二十年三月末現在、二、六五六名の皆様から、八、六九〇、〇〇〇円を頂きました。

今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

本年は進修同窓会にとって多難な年になってしまいました。長年本同窓会を支えて来られた会長・副会長を相次いで失いました。本会にとって計り知れない痛手であります。

この会報で、これまでシリーズとして「恩師を訪ねて」を掲載してきました。今号では横田先生を予定し、取材の快諾をいただき、編集担当者がご自宅にお邪魔することになっていました。その矢先の訃報でした。このような訳で今号の「恩師を訪ねて」はお休みします。

もう一つ、今年目だったことは、旧本館のマスコミ取材です。この一年間でみますと、週刊文春(ぶらりわが街大人の散歩)・週刊新潮(わが街日常遺産)などの週刊誌や各種情報誌などの教養欄に、今に残る近代建築遺産として取り上げられています。とくにJAL情報誌(Agora)には『アカンサスの学舎』として素晴らしい写真と文章で旧本館が紹介されました。また、テレビや映画のロケ地としても旧本館は注目を集めています。

◇　◇　◇

進修同窓会会報第65号
発行日　平成二十年十二月一日
会報編集委員会
編集委員長　青山和幹
編集委員　木島幸夫
飯村弘夫
上木雄博
片岡尚良
谷中志郎
古越仁一郎
堀徳田憲
鈴木一
宇田川
鈴木
池田
豊
井上崎正治
木田利明
越川淳一
徳田憲
中尚志
岡良
村博
木雄
島博
山和義
校内